

近代南画の巨星 田能村直入の生涯とその功業

村田隆志*

The Life and Achievements of the Modern Nanga Great Master Tanomura Tyokunyu.

Takashi Murata*

Abstract

Tanomura Tyokunyu is a great painter. He did excellent work in many fields, including modern Nanga, Sencha and art education. However, there is a lack of research to the contrary. In this paper, his life is summarized, the various roles he played are introduced, and it sets out a number of points of contention. It then develops an exploratory essay and offers perspectives for future research.

キーワード

近世・近代日本美術、南画、文人、美術教育、煎茶

Key Words

Early Modern and Modern Japanese Art, *Nanga*, *Bunjin*, Art Education, *Sencha*

I はじめに

日本近代美術史は、様々な画家によって彩られてきた。本書の主人公、田能村直入（1814～1907）も、その一人に他ならない。

同時代の美術史家、大村西崖が語る、当時の状況は極めて興味深い。

予が齢いまだ弱冠ならぬ明治十五六年の頃は、維新前までの世風、さまではあせやらで、漢学なほ文壇の権威を有し、画道も化政天保以来の余勢を保ちて、謂はゆる南宗文人画のみ行は



図1 田能村直入筆
《田能村直入自画賛小影》

* むらた たかし：大阪国際大学国際教養学部教授（2022.12.2 受理）

れ、五岳直入晴湖等の作は、真贋相雑はりて、予が郷里なる嶽南の片田舎までもてはやされ……
大村西崖『文人画の復興』¹⁾

明治15年(1882)頃、西崖のいた現在の静岡県富士市周辺においては南画の人气が高く、直入らの作品が、真贋入り乱れながらも持てはやされていたという状況をありありと伝えている。しかし、その絶大な人気に反して、現在の直入についての研究蓄積は極めて乏しい。その理由については、以下のように整理できよう。

- ①直入が94歳という天寿を全うし、逝去の直前まで旺盛な意欲を示して膨大な作品を遺したこと。
- ②大分に生まれ、京阪で制作活動を展開した直入の足跡は、大阪、京都、島根、長野等の広い範囲に及んでおり、それぞれの地域での活動を捉え難いこと。
- ③生前から極めて人气が高く、贋作と思われる作品が世の中に氾濫していること。
- ④直入の歿後に後継者たちの逝去が相次ぎ、長期的・連続的な顕彰の機会が失われたこと。
- ⑤現代の日本近代美術史研究者間において、南画の研究が低調に推移しがちであること。

①②の問題については、直入の実作品の調査についての問題である。全国に散在している直入の、多数の作品を網羅的に調査することは相当に難しい。

③は、さらにその調査を難航させる要素でもある。先に西崖が「真贋相雑はりて」と形容しているように、明治15年頃の時点で真贋が不確かな作品が、直入の活動地域である関西から遠い静岡にすまま見られたのならば、その後にも継続的、全国的に贋作は生み出されていたと考えられる。

④の問題も深刻である。直入の高弟である田近竹邨は、日本南画院を創立するなど、南画振興のために乗り出しつつあったが、58歳で逝去、田中柏陰も69歳で逝去していた。直入の養子となり、画神堂を継いでいた田能村小斎は顕彰に努めたものの、直入の逝去後ほどなくして後を追ひ、その息、小篁は32歳という年齢で直後に逝去してしまっていることも悪影響を及ぼしている。

⑤は、一転して現代の問題である。日本近代美術史では南画を等閑視する傾向が極めて強く、直入はこの弊に大きく影響されている。

これらと、後述するいくつかの悪条件が重なって、直入の事跡については本格的に論じられているとは言い難い状況が続いてきた。本稿は、直入の生涯のあらましを紹介²⁾し、筆者の前稿³⁾では述べなかったことを指摘しつつ、いくつかの論点を設定してその功業を考えようとするものである。

Ⅱ 田能村直入の学画時代

1 生誕と幼時、田能村竹田への師事

後の田能村直入こと三宮松太は、文化11年(1914)2月15日、豊後岡藩で代々銀会所

に出仕していた三宮利助を父に、きみを母として、その三男として、豊後国直入郡竹田寺町（現大分県竹田市寺町）に生まれた。直入こと松太は幼い頃から人懐こく、日々他家に留められて泊まるということが続き、父がどこへも出ぬように、伝太と改名した。

その後、伝太は近在の豊音寺の境内の砂に武者絵を描いて楽しむようになったが、この時期には早くも彼の生涯を左右する出会いがあった。当時、殿町に住んでいた田能村竹田が寺町に茶に招かれるとき、境内を通っていたのである。竹田は何度か伝太を見ていたというが、最初は偶然だったにせよ、その後はある程度の興味を持ってその姿を見、記憶に留めていたと思しい。これ以前、わずか3歳で、錦絵を写して人物を描き分け、大人を驚かせていたという伝太の画技は、未熟ながらも竹田の目を惹いた可能性がある。

数え年6歳を迎え、書を伊藤源兵衛に、翌年には狩野派の絵師、岡本梅雪に絵の手ほどきを受けつつあった伝太の画への想い、秀でた素養をいち早く認め、画人としての前途を拓こうとしたのは伯父にあたる渡辺蓬島だった。若き日の竹田に画技を手ほどきした旧師でもあった蓬島は、身内の伝太を竹田に託そうとしたのである。

文政3年（1820）の春、蓬島の長寿を賀した寿筵を竹田が発起して催した折、蓬島は伝太を竹田に引き合わせ、弟子として育ててほしいと依頼した。竹田はかねて砂の上の絵を覗いていたこともあって快諾し、伝太は早速に席上揮毫の補助を務めたという。「直入」の号は生地（なおいり）の直入（なおいり）に由来するもので、初号ではなく後年に名乗るものであるが、本稿では煩を避け、この入門の時をもって、伝太を直入と改めて叙述する。

8歳で通いの弟子から竹田荘での内弟子となった直入の生活は、夜明け前に起き、家事を手伝ってから藩の儒者、角田九阜のもとへ通って儒学を学び、帰って絵画の稽古、夜には竹田の肩を揉みながら『唐詩選』の講釈を聞く……というものであった。

直入11歳の頃、竹田の門には高弟として高橋草坪と帆足杏雨がおり、竹田は絵画の鑑定を求められた際には、この2人に優れた作を模写させて他日の参考としていたが、直入は幼年のためにこれを竹田に許されず、悶々としていた。ある時、直入は草坪に懇願して内密にその役を譲ってもらい、完全に臨模を終えたという。しかし、竹田は一見して筆癖が見慣れぬものであることに気づき、草坪から直入が写したものであることを聞いて、その技量を認め、以降は模写を許したのである。

2 直入の芸術と「我意」——富岡鉄斎との比較を通じて

これ以降の、直入の模写を目にした竹田の評は、その後の直入の画業を語る上で極めて重要である。「草坪も杏雨もよく写すことは写すが、どうかすると我意が交る。然し、伝太にはその弊がない。且つ往々にして古画の神を伝えることがある」と語ったというのである。

後述するように、直入は先行する作品の模写を徹底的に行い、その中で自分の表現を磨き上げた画家である。各地の名画を模写し、所見を付して上梓した『汲古山泉』や、竹田の没後に、恐るべき執念を発揮してその作品を搜索、各地に足を運んで実見し、克明に模写した《竹窓疎月帖》など、直入は模写を基盤とした画道修行を生涯続けていた。それらは、確かに我意が薄く、もとになった作品の真髄を伝えるような要素が見られることは特

筆される。

直入は、様々な画風を使い分けて、一人の人物が描いたとは思われないほどの多様性を見せた画家である。何を描いても甚だしい我意と共に表現する、23歳年下の富岡鉄斎とは、同時期に同じく南画を描きながらも大きく異なっている。

我意を交えることなく、古画の真を汲もうとする……それは、竹田の画業とも共通する要素である。近代以降の芸術は、画家の個性の表出を強く意識し、評価する方向に進んだ。その点において、現代の評価基準では鉄斎がより好意的に迎えられているのであるが、もしもそれ以前の基準で、直入の芸術を見てみるならばどうだろうか。

中国からもたらされた名画に通ずる優れた表現を、多様な画風で自由自在に描き分ける同時代の画家を極めて高く評価するのは、ある意味において当然ではないだろうか。先に、直入の今日の評価の低さの理由を五つ挙げたが、さらに「⑥直入の在世当時と現在で、芸術の価値基準が異なっていること」を加えるのが妥当ではないかと思われる。

3 田能村小虎の誕生——号に竹田が託したもの

天保2年（1831）、18歳になった彼に、竹田が与えたのは「癡」の名、「顧絶」の字、「小虎」の号だった。

この名は東晋時代の伝説的な名画家で、「書聖」王羲之に対して「画聖」と称えられた顧愷之（344頃～405頃）に因む。彼は同時代の人々に、画・才・癡の三絶と称された人物であり、「画絶」「才絶」とは画と文の才が絶佳であること、「癡絶」とは「書癡」の語があるように、何かに夢中でそのことに没頭するあまり、他のことには気が利かないことが甚だしい、との意味である。また、顧愷之は虎頭將軍に任じられたこともあり、官名から顧虎頭とも呼ばれていた⁴⁾。

つまり、竹田は直入に、今は顧虎頭こと顧愷之に及ばぬ「小虎」でも、「癡」を發揮してやがては「顧」愷之を「絶」するほどの大画家に、という深い意味を持つ名・字・号を与えていたわけであり、この時点で彼の将来の大成を確信していたことが窺われる。竹田の直入への評価はこれほどに高く、期待はこれほどに大きかったのである。

4 田能村直入と田能村姓—竹田は直入を養子としたのか

直入が竹田に迎えられて養子となり、田能村姓となったのは内弟子となった直後であるとする資料もある⁵⁾が、まだどう成長するか分からない段階で、そのような行動を採ったかどうかについては一考の余地があるように思われる。直入が田能村を名乗るようになったのは「小虎」号の授与時期、もしくは直入が20歳で元服した天保4年（1833）正月に相前後する時期のことではなかっただろうか。

竹田が、実子がいたにも拘わらず、なぜ直入を養子としたのかについては、従来深く考察されていない。「竹田其才を愛し養ふて養子となし以て田能村氏を冒さしむと（一説に竹田の歿後直入竹田の長子某に乞ひて田能村氏を称せりと此説恐くは信ならん）」と記す例⁶⁾がある。現代でも巷間には「直入は竹田の没後に箔をつけるために田能村姓を僭称したのだ」とさえ語る例さえあり、筆者もその種の言を大分や京都、大阪で今までに何度も耳に

してきた。竹田の研究者が直入にほぼ触れない例が極めて多いのも、このような情報に少なからず影響されていると思われる。

このような風説を生んだ背景は、たとえば以下のような言説に支えられているだろう。

直入が本姓「三宮」を改めて、「田能村」を冒した顛末は、私の関知し得ない所で、何かそれだけの深い筋道はあつたであらうが、現に田能村氏の樋は如仙—瘦客（耕策）—梅士、及び当主（梅士弟）小竹（力）氏に及び、直入がその家名を称する道理は無かつたようにも思ふ。
（木崎好尚『百年記念 田能村竹田先生』⁷⁾）

確かに、竹田には実子の如仙がおり、家督を継いで医業をも修め、立派に田能村家を盛り立てていた。これだけを考慮するならば、直入が田能村姓を名乗る必要はないが、本稿では試論を述べる。

画聖にちなむ意義深い名・字・号を授けたこと、そして後述する大塩平八郎に入門させたことが象徴するように、竹田が直入を極めて高く評価していた事実は、まず前提として確認しておかなければならない。さらに、直入は《竹窓疎月帖》が示唆するように、竹田が生前に親交のあった人々の元を訪れ、所蔵の膨大な作品を模写しているが、このようなことが竹田の没後すぐに田能村姓を僭称するような人物に可能であったとは考え難い。また、晩年の帰郷にあたって直入が田能村（本）家を訪問したところ、如仙は玄関に出迎えて歓待し、画を求めるなどの関係が継続していた⁸⁾ことも見逃せない。

筆者は、試論として以下のことを提示したい。竹田は、如仙に歴代の岡藩の家臣としての田能村家を託しながら、直入に画家としての自身の存在を次代に受け継ぐ役割を期待したのではないだろうか。

竹田の周囲には、『竹田荘師友画録』にも登場しているように、岡田米山人や浦上玉堂がいた。そして、その子、岡田半江や浦上春琴とも竹田は密接な関係を結んでいた。藩に属さない自由な身分で芸術に親しむ次世代によって、親世代の画人の名が高められ、活動が一部であるにせよ受け継がれていくという京都や大坂の状況を竹田は熟知していたのである。半江や春琴が果たしている役割を、自分の場合は誰がやるというのか……という問いに直面したときに、竹田が直入に田能村姓を名乗らせるという答えを見出した可能性を指摘しておく。そして、このような田能村姓僭称説に代表される傾向を「⑦生前・歿後の直入に、謂れなき誹謗中傷が加えられがちだったこと」として、直入への評価が低いままに推移してきた理由として数えておくものとする。

5 中齋大塩平八郎への入門と、両師との永別

直入は元服の翌年にあたる天保5年（1834）竹田に伴われて豊後を出て、竹田とごく親しかつた大塩平八郎こと中齋に師事することになった。大坂到着は8月26日、直入の入塾は9月6日のことであつたという。

中齋はこのときすでに大坂東町奉行所の与力を辞しており、自宅の私塾洗心洞で門弟の教育を盛んに行っていた。直入は陽明学の講義を聞き、佐武利流の槍術の稽古に励みつつ、

竹田の友でもある篠崎小竹や藤沢東咳らにも詩文の添削を請い、大坂での学びを深めていった。

洗心洞時代の直入について、中斎の養嗣子、格之助から子供の初節句を祝うための武者人形の図を依頼された折の逸話は、中斎がどのように直入を捉えていたかを端的に物語る。極彩色の八幡太郎を描いている途中の様子をたまたま見かけた中斎は、すぐさま講堂に門人全員を呼び集め、「学問を基とした南宗画を描いている田能村竹田の養子の身で、なぜあのような俗画を描くのだ」と叱責したというのである。友である竹田から託された直入の教導に配慮していたことが窺われよう。

直入の洗心洞入門の翌年、天保6年(1835)の6月8日、竹田は大坂を訪れている。23日には中斎を訪ねて「議論如湧」の一夜を過ごしたと豊後の如仙に書き送っているが、この時に直入が同席したかは不明である。しかし、この大坂滞在中の一日、竹田は直入を宿へ呼び寄せ、帰郷を命じたという。

中斎は2年後の2月19日に門弟らと共に「大塩平八郎の乱」を起こしているが、竹田は対座しての「湧くが如き」議論の中に、共通の友である頼山陽が生前に心配していたような中斎の危うさを感じ取って、直入の身を案じた可能性もある。

中斎が就寝中の塾生の様子を見て回ったとき、直入は口を閉じて寝ていたという。「寝ている間に口を閉じている者には見込みがある」と中斎は直入に語っており、蜂起の際に直入がなお洗心洞に留まっていたならば、命を失っていた可能性が極めて高い。竹田のこの時の帰郷の指示は、直入を救ったといえよう。

竹田は大坂滞在中に体調を損い、7月には吹田の井内家に転地して病の身を養うことになるが、この間、竹田の看病に直入が関与したり、見舞いに訪れたりした形跡は見られない。竹田が健康であった6月の早い段階で、直入は大坂を離れていたであろう。

そして、竹田の病は次第に重篤となり、8月29日にはついに59歳を一期として客死する。竹田の実子如仙はこれに先立って大坂へ向かっており、国元にも竹田の病状が悪化していることは伝えられていたが、直入は郷里に留まっていたと考えられる。

22歳になっていた直入はこの後の3年余を喪に服しながら、田能村家の菩提寺、西光寺に《十六羅漢図》を寄進している。この間には大坂で先述した大塩平八郎の乱が勃発し、中斎をはじめ、共に学んだ門人たちが刑死や戦死、自決してもいる。この頃には直入は眼病を患って絵を描くことができずにいたといい、参禅を試みるなど、直入は心の痛手を癒しながら再起の時を模索していたと思われる。

Ⅲ 田能村直入の大坂での日々——画家としての本格的出発と活動

1 大坂再訪と堺での日々

天保8年(1837)8月、帆足杏雨や後藤碩田と共に竹田の三回忌の追福会を鶴崎本満寺で営み、《出山釈迦図》を供えた直入は、やがて再び大坂を目指した。天保10年(1839)の春のことであったが、この頃は京都や大坂に大家が多く、まだ若い直入が画で頭角を現せるような状況ではなかった。

赤貧にあえいでいた直入は、竹田の友人、岡田半江のもとに相談に訪れ、「若い南画家に教えてほしいという素封家がいるから、紹介しよう」という申し出を得た。直入はこの好意を受けて中河内へと赴き、この地の富農、橋川氏の世話になって森小路に小宅を構えた。ここで5、6人に南画を教えることから、本格的な直入の画家としての人生は始まったのである。直入はここから住吉の半江のもとへ足しげく通い、謝意を表すると共に、画論を問うた。奢らず、なおも研鑽に励む直入の真摯さは人々に知られるようになり、次第に弟子は増えて、1年あまりで河内から堺にかけて相当数の門人を抱えるようになっていった。

やがて直入は堺の神明街に居を遷し、妻を迎え、橋本桂園や日根対山など、近隣の南画家たちとも親交を深めていく。この時期、対山は、当時盛名のあった貫名海屋に師事しようと考え、直入を誘った。直入は竹田の逝去以降、長く独学を貫いていたが、その限界を悟ってもいたので心が動いたという。

決めかねて竹田、中斎の友でもあった篠崎小竹を訪ねて助言を求めたところ、小竹は色を作して反対し、「海屋が範としているのは清人の画であるが、目指すべきは竹田も目標とした元明の画の境地である。そして、竹田の相続者である君が海屋に就くなどと考えてよいのか」と諭した。小竹は「(竹田)翁は没しても、翁の精神は残っている。翁の作品に触れるとき、君は深甚な手本を得るはずだ」と言葉を重ね、「竹田翁を去って海屋に就かうといふやうな者は絶交ぢや」と言ってからからと笑ったという。

前述したように竹田の作品模写に想像を絶する苦心を重ねた直入であるが、その契機は小竹のこの教えにあったと見るべきであろう。旧師の人的関係は、歿後になお直入に益していた⁹⁾のである。

2 千画会の偉業

弘化2年(1845)、三百人以上に増えた門人たちは、大坂に直入を呼び戻すことを考え、船場・安土町に家を設けて迎える準備を整えた。直入もこれに応じたが、7年間を過ごした堺に何か記念を残したい、と考えた直入は、一日に千枚の絵を描く「千画会」を発案した。

決行の3月初旬、堺の天神祠で行われた千画会の実態は想像を絶する。紙を広げたり、墨を磨ったり、印を捺したり、紐に吊って乾かしたりは門人たちが役割分担したものの、直入は朝8時から12時間を通して描き続け、昼飯として握り飯を2、3個頬張ったのみで、茶の一杯も飲まなかったという。この間、揮毫は968枚に及び、ついに千枚には達さなかったというが、描き殴ったような粗画ではなく、どこかに直入風の精彩を宿した作品になっていることに、人々はとても人間業ではなく、神か天狗かと騒いだという。60(秒)×60(分)×12(時間)÷968(枚)=44.6(秒)となる。単純に計算すれば、約45秒で1枚の作品を描いたということである。当時の直入の健腕を何よりも物語る事例と言える。



図2 田能村直入筆
《玉堂富貴図》

直入は、969 枚目として、水墨の図 2《玉堂富貴図》を描いて筆を収めた。玉蘭（白木蓮）と海棠、紅牡丹を描く筆致は的確で、超人的な制作をやり遂げた後の疲弊を感じさせない。「弘化丙午新春一日千画会就後燈下漫製耕烟山房主人田癡」とある款記から、堺では「耕烟山房」という齋号を用いていたことも知られて貴重である¹⁰⁾。

3 大坂での日々——さらなる研鑽

堺に大きな土産を残して大坂に遷った直入は、咬菜吟社を結成して詩文の実作も重ねつつ、寸暇を惜しんでなお学画に励んだ。蠟燭や行燈の弱い光では夜に支障があるので、紙縫りに蠟を塗って火をつけ、左手でかかげながら右手で描き続ける工夫まで凝らしたという。

堺時代にも竹田の七回忌追福会を営んでいた直入は、十三回忌も営み、郷里の西光寺にも《白衣観音像》を寄進している。

この頃、岡藩の蔵屋敷の用人が直入に対して「南画よりも当世流行の四条派や岸派を描いてはどうか」と勧めたことがあったという。黙して答えなかった直入は、その用人が去ったあと、居合わせた人に「竹田先生の南画の精神を伝えて、ますます精進しようと思っっている私に対して、金欲しさに他人の流儀を真似るように思われるとは」と大声で叫んだという。座中の人は「また大塩先生がでましたな」と返したといい、この時期にあってもなお竹田・中齋の感化の著しかったことが知られる。

大坂は近世を通じて「天下の台所」と称された繁華の地で、相当の素封家も多く、名品も多数所蔵されていた。そのうちの一幅、趙子昂の《十八賢士登瀛図》の傑作には魅せられ、常に同じ心境を保つために来客の少ない毎月の最終日前後 3 日間を模写に費やして、7 年間を費やして完成させたという。岡藩の藩主、中川家に献上された本作のような、直入の研鑽を何よりも物語る作品が、近年公開されていないことは直入の真価を知る機会の喪失につながっていることが惜しまれる。

4 健腕による多数制作の時代——五百羅漢像の制作

この時期以降、直入は千画会で発揮した健腕を縦横に揮い、膨大な量の作品を制作してその資を活用して様々なことを成し遂げるといふ、それまでの画家にはあまり見られなかった活動を展開していくようになる。

その初例は大坂・天王寺近くの清寿院関帝堂の修繕のために《羅漢像》五百幅を描いたことである。直入がなぜこの挙に出たかは不明であるが、中国に由来を持つ南画家として、中国で尊重される関羽の廟が荒廃しているのを座視するのが忍び難かったのかもしれない。

直入はこの時、日本人の描く羅漢はほとんど同じ顔で、円山応挙でも月僊でもほとんど決まりきった顔のみを描いていることを思い、五百の羅漢の顔を全て違った様子で描こうとした。しかし、古画や実際の人間を参考にするにも、その数を満たすことは容易ではないと困惑していたとき、偶然薪を目にして、その切り口におのおの異なる顔を見出し、参考にしたという。直入の向上心、発想力をよく物語る逸話だと言える。

嘉永4年(1851)に制作を始め、完成は翌年、2月15日に羅漢供養を催したのちも、安政6年(1859)の高麗橋への転居に際して、布袋の土人形を作り、一室を祭祀の場として「一文庵」と呼び、《布袋像》五〇幅を描いて知友に配ってもいる。

5 青湾碑の建立と青湾茶会の举行——茗讌の大盛事

文久2年(1862)は文人の嗜みであり、竹田も、直入も親しんだ煎茶に大きな役割を果たした売茶翁高遊外の百回忌にあたって、直入はこの記念すべき年にあたって、青湾の水で墨を磨って売茶翁図百幅を描き、その潤筆料で大坂・桜宮に「青湾碑」を建立している。

この折に直入が開いたのが、史上に名高い青湾茶会である。青湾は中国・杭州の西湖の水に似通う風景と水の味を持つ特別な所とされ、多くの人々がその水で茶を煮たところであり、そこで茶会を催すことで、直入は売茶翁を顕彰しようと試みたのである。

青湾碑の落慶を記念した4月23日の茶会は本席7、副席4、別席1で、世話方は90余人、早朝にはじまり、夕方に終わったが、席入りして茶を喫したのは1200余人、盛況を見物に来たのは数千人という空前の規模、その後も絶後の大盛事であった。

さらに直入は7月15日、売茶翁の命日にも追善の青湾茶会を催している。こちらは来会の人数こそ少なかったが、前回よりもむしろ文人的な工夫を凝らし、人数は十分の一でも十倍の楽しみがあったと直入は述懐している。

前・後2回のこの茶会については、会記に直入たちによる細やかな茶席の図を配した『青湾茶会図録』天・地・人三巻が後に刊行¹¹⁾されており、いまでもその風韻を偲ぶことができる。そのみならず、この図録の形式は、煎茶会を記録する「茗讌図録」の典型として長く影響を及ぼすことになった。直入は、南画のみならず煎茶においても、主導的な立場を占める存在であったのである。



図3 「青湾碑」
(大阪市都島区所在)

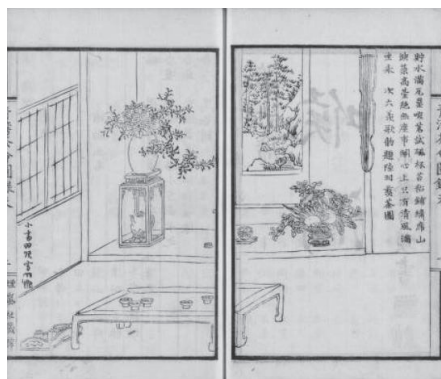


図4 『「青湾茶会図録」の茶席図』

6 寝屋川・萱島での日々——百椽圍の風流

文久3年(1863)、直入は病気がちになり、北河内の萱島(現寝屋川市)に家を借り受けた。後々に名所が残るように考えた直入は、「誰でも梅を一本寄付したものにはその大小によって、大きさの異なる梅の画を一枚進呈する」と発信し、すぐに数十本の梅が

植えられたという。「百株圃」と命名したこの別荘¹²⁾に半月、高麗橋の自宅に半月を過ごして、直入は人生で最も心落ち着く生活を送ったものと思われる。

これらの活動に先立つ嘉永6年(1853)、直入は弟子の小斎を養子として田能村家の今後を安定させていたが、この時期には郷里の藩との関係にも変化が生じていた。直入は田能村姓を継いでいたものの、藩士としての家格は竹田の実子、如仙が継いでおり、身分としては武士ではなく、主を持たない布衣の身であった。

ところが参勤で江戸在府中だった岡藩藩主、中川久昭が南画家、春木南溟を招いて画を学んでいた時、ふと談が各地の画家に及び、南溟が「大坂ならば田能村小虎」と名を挙げたことが転機となった。久昭はそれが自藩の出身者であることに気づき、帰国の途次の大坂で、直入を蔵屋敷に召し出して揮毫させたのである。その筆力に感服した久昭はただちに士分に取り立て、三人扶持を与えた。この時期の直入は画名が高まり、養子を迎えて次代の憂いもなくなり、武士としての身分も得ていたのである。

直入の画名は江戸まで聞こえるほどになっていたわけであるが、それにつれて藩士としての立場も上がっていった。元治元年(1864)7月には中小姓格、二十人扶持となり、蔵屋敷の近くに住むように命じられた。これは幕末の動乱期が近づいていた時期のことであり、大坂での様々な人脈を持ち、さらには軍学や槍術の心得もある直入の協力を危急の折には期待したいという意識が藩側にあったものかもしれない。

7 岡藩士としての昇進と「直入」の改号

これを受けて、慶応2年(1865)には直入は蔵屋敷から距離のある萱島の百株圃を離れることとし、羅漢供養を開いて別れを告げ、青湾碑の近くに青湾茶寮を建てて移り住んだ。翌年には青湾で白衣大士像三十三幅を描いて、竹田の三十三回忌の追福茶会を開いてもいる。

この時期には、直入の職位はさらに上がって御側役となっていた。藩主の大坂滞在中は近侍して種々の用を弁じることが求められた直入は、この動乱の時代には幕府から京都在勤を命ぜられた久昭に随って三本木や聖護院などに随従し、諸大名を招いての宴には席上揮毫を行った。これ以前に山内容堂や藤堂高潔に招かれたこともあった直入の揮毫は耳目を集め、直入の画名はさらに高まったという。

直入は公式には本名である伝太を名乗っていたが、藩主の使いで藩邸に赴く際には彼が既に高名な画家、小虎であることが理解してもらえず、玄関先で待たされることがしばしばあった。後から何者かが判って恐縮されるということが相次いだ結果、彼は藩主の許可を得た明治元年(1867)、伝太を廃して小虎を通名とし、それまでにも用いてきた居士号「直入」を用いるようになったのである。

IV 田能村直入の京都時代

1 京都移住と再婚、地方遊歴と御前揮毫

明治元年(1868)には、藩主の名によって洛北の等持院の中川家の祖先の肖像画を臨模

するために京都に居を探すことになった。聖護院近くに住まいを探し、家受人を旧知の日根対山に依頼したが、訪問時に泥酔していて捺印を得られず、困惑して大田垣蓮月を頼ったところ、「女の私よりも」として富岡鉄斎を紹介されたのが、二人の出会いであったという。

藩命の臨模を終えた頃、明治維新となって藩主は東京へ向かったが、直入は随行しなかった。これ以前に妻に先立たれていた直入は、御幸町四条北の寡婦、梅子と再婚している。梅子は俳人の娘で、養子婿を取っていたが維新前に婿は逝去しており、再婚同士のよき縁として媒介する人があったという。2人の間には、徳蔵、直子の2子が生まれるも、いずれも夭折している。しかし夫婦仲は極めてよかったらしく、2人は以降、終生連れ添った。

直入はこれ以前にも32歳で紀州の和歌浦、40歳で播州の高砂、50歳で吉野山、51歳で高野山などを遊歴していたが、動乱期が過ぎ、京都に住むようになったこの時期以降は地方への遊歴が活発化していく。

明治2年・月ヶ瀬、同3年・高砂・城崎温泉、同4年・丹波・淡路・丹後・伯耆、同5年・湯島温泉・豊岡、同6年・湯島温泉・豊岡、同7年、湯島温泉・豊岡・宮津、同8年・宮津、同9年・近江

この頃の遊歴の地を列記したが、ほとんど近畿圏に収まるものの、相当の面積に涉っていることが分かる。この時期の直入は各地で煎茶会を催し、大いにその趣味を鼓吹したといい、文化の伝播にも影響を及ぼしていた。

還暦を過ぎてもなお壮健だった直入は、この時期以降、在京の大家として様々な活動に参画していくこととなった。明治10年(1877)の京都博覧会の開催に尽力し、京都で開催された全国絵画協進会では銀牌を受け、明治天皇・照憲皇后の臨幸に際しては塩川文麟、中西耕石、前田半田と共に御前揮毫を行い、《天保九如図》《榊尾秋色図》《五福寿図》を献上、金帛・白絹各一疋を下賜された。9月にはこの栄誉は物故した先人たちのおかげでもあると考えて、青湾で4度目の大茶会を催し、800名余の人々が会している。

2 京都府画学校の建議

京都の画家として、直入が独特の行動力を最大限に発揮したのは、何といても京都府画学校の設立であろう。直入が滞在していた高砂の曾根、臨江亭で書き上げ、榎村正直府知事に提出した「画学校起校上書」(京都市立芸術大学芸術資料館蔵)¹³⁾には、画は世の中、人々にとって功のあるもので、先師竹田や兄弟子杏雨、草坪には画学校を作りたいという志があったこと、明治新政府によって、各地に学校が開かれているのに、画についての学校のみ存在しないことが切々と記されている。

さらに直入は天皇が東京に遷られたあとでも京都にはなお文化、芸術を愛する遺風があり、画学校を設立するならば京都において他に場はない、と訴えている。

文中「先師の遺業を尋ねて二三子に謀りて此の校を興さんと欲す」とあることは注目される。直入の画学校創設の建議は、京都の画家たちの総意の上に行われたのではなく、竹

田の想いを継いで、ごくわずかな人に相談しただけでなされたものであり、当初はかなり私的な要素を帯びていたのである。

直入は末尾で、今後広く遊歴し、作品を売ることで費用を作りつつ、同志を誘って寄附を募り、画学校を実現したいと宣言しており、運営は府に委ねても、開校までの資金調達自身で算段しようとしていたことを窺わせている。楽隠居して余生を送ってもおかしくない65歳という年齢での、このような直入の発想と行動力には際立ったものがあるといえよう。

3 中国地方遊歴と画学校開校、摂理就任

建白書を高砂から京都へ送った直入は、早速遊歴の旅に出る。田部長左衛門という数寄者が出雲に居ることを聞き知っていた直入は、紹介者を得てそこを目指したのである。ところが、到着の前に櫻井という家を通りすがった直入は7、8年前にこの家の老女が大作を依頼しに訪ねてきたことを思い出して、訪問することとなった。老女は直入の突然の訪問を大歓迎し、一家でもてなした結果、直入はひと月以上もこの家¹⁴⁾に滞在することとなり、このことを伝え聞いた田部家は当初立腹したという逸話が残る。

とはいえ、松江でも直入は歓待されたく、結局1年半近くを過ごしている。ようやく帰洛した直入を迎えたのは建白以降の2年間の留守中の情勢変化だった。望月玉泉、幸野楳嶺、久保田米僊、巨勢小石が直入とは別に京都府に「画学校開学建議書」を提出したこともあって、京都府画学校は開設に向かって動き始めていたのである。

明治13年(1880)7月に開設された画学校で、直入は摂理(校長)を勤めることとなり、学生のために多年収集に努めてきた中国絵画の名品を学生たちの制作の参考のために寄附¹⁵⁾している。

この時期の直入の面目を伝えるのは、時間割に関する府の担当者との問答である。「運動休息」(休憩時間)が設けられていない時間割に困惑した学務長がその旨を伝えたと、直入は「他の学生ならばともかく、画をもって生命とする画学生にそのような時間は不要」と拒絶したのである。「そうはいっても休憩時間がないことには」となおも食い下がられると、直入は「そんな必要はない。現に私は休憩時間などなくやってきた」と答えたという。最終的には学務長は運動休息の時間を確保したというが、超人的な努力を重ね続けた直入ならではの言であり、その制作への態度を物語っている。

4 初の東日本行と大蔵省への建白

明治15年(1882)10月、自身も出品して褒状と銅印を受けた第1回絵画共進会に際して、直入は初めて東京を訪れている。その折、「西京画学校摂理」として大蔵大臣松方正義に提出した建白書は、明治天皇宸筆の「大日本最初四宗画学賞」の額の下賜、文部省からの維持資金貸与、宮内省有志の寄附、教員職員への位階付与、そして貧しい家庭に育った画学生への奨学金を求める内容であった。この請願は容れられなかったが、奨学金を支給しての学習機会の提供は、後に直入が独力で達成することになる。

5 南宗画学校の開校

先の間答が象徴するように、画学校の実際の運営に際しては直入の意に適わぬことも相応にあったらしい。特に、府の方針が蒔絵や陶器、漆器などの工人を育てようとする方針に傾いたことを直入は問題視していた。

やがて直入は真に竹田の遺志を継いで独自に南画教育を行える画学校の設立を考えるようになり、明治14年（1881）には京都荒神口に新たな居を構えた。2年後の正月には、直入はここに「南宗画学校」を開き、自力で次代の南画家を育てていくことになるのである。

この学校は東脩として1円、菓子料1円を徴収するだけで、画材や薪炭、食費、はては衣類まで供したといい、実質は無料で南画を学ぶことができる場になっていた。京都府画学校では達成できなかった奨学生の制度を、直入は導入していたのである。

6 画神祭と画神碑——「画神」の意味

荒神口の家に、直入は酷愛する梅を多数植え、花の盛りには観梅を兼ねた「画神祭」を開いた。梅は南画の基本である四君子の一人で、百花の魁であり、画の神に捧げるには最もよいものと考えたからであろう。日本は八百万の神の国であり、そのなかには画の神もおおわすはずであるから、それを祀り、祈ることでより素晴らしい境地に達し得る……と直入は考えていたらしい。

近隣に住んでいた宮家の家令、角田敬三郎が久邇宮朝彦親王にこれを話したところ、その心に感じた親王は特に「画神」と大書して下賜し、直入は以降、それを神位として祀り、碑に刻して庭に安置した。

この「画神」の意味については、付言しておく必要があるだろう。前述の僭称説のように、直入は生前から故のない悪評を浴びがちだった¹⁶⁾が、今なお「自分を画神と称した不遜な画家」という認識を持たれているきらいがある。この件についても、筆者は平成・令和期の巷間で一再ならず耳にしてきた。

しかし、これは事実と反している。直入が画神なのではなく、直入は画神を祀っていたのである。後年の作にしばしば見られる款記「画神堂主人」は「画神を祀る堂の主人」と解すべきであって、不遜などの言は的を射ていないことが明らかである。

明治20年（1887）には大阪天満宮境内に今も現存する画神碑を建立し、5月15日には竹田の追福を兼ねた大茶会を催した。茶席は18席、青湾茶会以来の大茶会と称されたという。翌年には大分に帰省し、竹田荘公園に現存する画神碑を建立している¹⁷⁾。



図5 「画神碑」
(大阪天満宮所在)

7 黄檗獅子林院の復興

明治26年（1893）、直入はついに80歳を迎え、寿星像八〇幅を描いて自祝し、その費用を画学校増築のために費やした。明治28年（1895）には日本南画協会の設立が議され、直

入は協力のうえ、南宗画学校を合併している。

堺にいた壮年期に、釈尊寺の天沖一和尚に参禅したことがあった直入は、この時期に偶然古い知人の黄檗僧、大雄弘法の訪問を受けた。世俗の雑事に倦んでいた直入はその折に出家を考えていると相談し、「荒れ寺ではあるが獅子林院がある」という答えを得て、彼は85歳にして黄檗に居を遷すことになった。参禅して得度し、住職となったのは明治32年(1899)のことであり、この年は竹田の六五回忌にあたっていたので10月には追遠会を催し、各塔頭に書画を展観、煎茶席をも設けて数千人が参じたという。老齡の直入の知名度と実行力を如実に物語っているといえよう。

この時期の明治30年(1897)には、大塩中斎の墓を、大阪の成正寺に建立している。現在の本堂前の墓石は戦災後の再建であるが、晩年まで続いていた旧師敬慕の念が窺われる。

8 洛東若王子での日々——「画神堂」の時代

明治34年(1901)正月、米寿を迎えた直入は、「満寿嘉慶」の四字扁額を百枚書いて知人に贈った。5月19日には円山の平野屋と左阿弥楼で門人が賀筵を開いている。

明治35年(1902)には黄檗宗の虎林嘩嘯管長から滋賀の寺院に転住せよという命があり、直入はこれを拒絶、老軀任に堪えずとして獅子林院から退き、還俗した。

頼山陽の孫、潔の旧宅であった若王子の家を買い、手を入れて入居したのに相前後して、「画神堂」の扁額を久邇宮邦彦王から下賜され、これまでのように「画神」の幅を祀る堂だけではなく、この家そのものを画神堂と号した。ここが、最晩年の直入の生活と制作の場となり、その後長く子孫が伝えて画神を祀り、直入を記念する場にもなった¹⁸⁾のである。

9 直入の長寿自祝となお続く精励

明治36年(1903)に90歳を迎えてもなお、直入は壮健で旺盛な活動を続けていた。2月には尾道に赴き、7月に帰洛、10月17日には大阪で九十の賀を祝う茶会を開いている。北は大阪天満宮、南は平野の堺卯楼までの間、展観席と煎茶席をあちこちに設けて文人たちを招いたという。

さらに直入はこの秋に明治天皇の命を受け、《仙山楼阁図》大幅、《溪楼観瀑・海内平穩図》双幅を制作してもいた。9月13日から12月上旬まで精進潔斎して描き、体を支えていた左手が痺れて茶碗も持てぬほどの精励で、完成後は山中温泉へ向かって手を癒したほどであったという。

10 最期の遊歴——92歳の大旅行

明治39年(1906)の直入の旅路は想像を絶している。5月、まず奈良へ赴き、名古屋へ出て静岡を経て東京に入り、久邇宮・伏見宮に拝謁して《水墨山水図》を献上、帰路は信州に立ち寄って妙義山に登ってから善光寺に参り、新潟にまで足を延ばしている。

さらに夏には渋温泉を訪れた。ここには門人、児玉果亭がいたが、実に両者の対面は30年ぶりのことである。67歳の果亭が、92歳の直入を郷里で迎えたという、この邂逅は美術史上稀に見る事例である。この渋温泉に向かう車中で、直入は同行していた妻、梅子に「来

年は奥州を遊歴してみよう」と言い、彼女は「あなた、来年は九十三歳でいらっしやいますよ」と笑ったと言うが、直入は超人的な精力をなお保っていたのである。

11 最期の多数制作、7000 枚の「萬々歳」

甲府、名古屋を経て 11 月に帰宅した直入を待っていたのは、京都市からの依頼であった。前年に終結していた日露戦争の帰還兵に対して京都市は記念品を贈る事を計画したが、資金がなく、市会議員が協議して直入に揮毫を依頼したのである。

直入はこの申し出を快諾し、「萬々歳」の額を書くことにしたが、その数は 7000 枚である。その日から揮毫を始め、毎晩 2、300 枚を書き続けて暮までに書き上げたが、故あって帰還兵への配布は中止されたという。

掲出の作は、行き場を失って土蔵に置かれていたが、時間の推移と共に持ち出されて巷間に散っていったと伝えられるもの一枚であろう。高齢を感じさせない、雄渾な筆致が目を惹く。

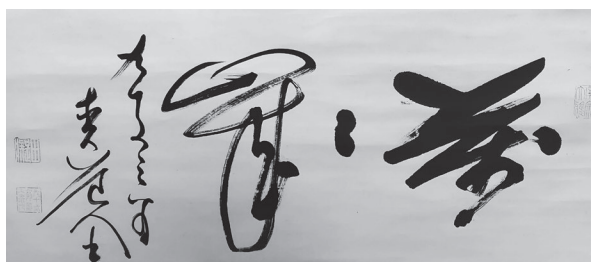


図 6 田能村直入筆《萬々歳》

12 直入の逝去——巨星の大往生

最晩年の直入は、妻と共に帰国間もない気鋭の洋画家、鹿子木孟郎のモデルになるなど、穏やかな日々を過ごしていた。それに終止符が打たれたのは、明治 40 年（1907）1 月 14 日のことである。

この日、直入は深夜 2 時まで作画に励んだ。厳寒の夜であることを案じて家族がしきりに止めたものの、獅子林院に祀っていた大黒天の祭日が迫っており、それには福引の景品として直入の作品を用いるのが吉例になっていたために、完成を急いでいたのである。

ようやく寢床に入った直入であったが、翌朝は常に起床する 4 時には起き上がれなくなっていた。17 日にはやや快復し、普請中の庭の小亭を検分に外に出たところ、「何だかぞつとしたような」と言って床に入り、以降は重体に陥った。



図 7 鹿子木孟郎筆《老画家夫妻》

18 日からは右手を上げて、虚空に描く仕草を行うようになったが、なお厠には自力で向かったという。しかし、次第にうわ言を口にするようになり、21 日夕には危篤状態となった。家族や門人が枕頭に集まったところ、直入は起き上がり「やあ、皆が来て居るか、お前も来たか、あゝ賑やかぢや賑やかぢや、大会ぢや大会ぢや」と歓喜の声で言い、「さあ、

葉をおくれ」「もう暫く横になろう」と言って再び床に入り、午後6時39分に遂に逝去した。享年94歳の大往生であった。法名は弘徳院心誓竹翁直入居士、洛東の神楽岡、吉田神葬墓地の壮麗な墓に葬られている。

V おわりに——直入研究の今日的意義

以上、直入の長い人生を略述した。最前に、直入の研究が深められていない理由を列記したが、そのうちの最たるものについて、再び指摘しておきたい。

直入には竹田に入門する前から、折れ釘で地面に描き続け、白い紙がないので漬物用の干し大根に墨で描いて、実家の三宮家では墨痕のある漬物を喰うことを余儀なくされた、という逸話が伝わる。そこから94歳の逝去の数日前まで活発に描き続け、百や千を以って数えるような多数の制作もたびたび行った直入は、日本美術史上、最多の作品を遺した画家にほかならない。そして同時にその全貌を知ることが、最も難しい画家だと言わねばならないだろう。

しかし、難しいからといって、従前のように放置してはならないはずである。竹田の想いを継いで創立した南宗画学校に託した、直入の南画伝承の夢は、次代以降に受け継がれた。現代の日本において、水墨画の最大の団体である「日本南画院」は田近竹邨やその弟子、河野秋邨によって創設されたものであり、現代でも指導者の系譜をたどれば直入に行きつくことはかなり多い。直入の研究には、今日的な意義も極めて大きいのである。

美術史の研究者が画家を論じる場合、多く「画業」という言葉が用いられる。しかし、筆者はあえて「功業」の語を用いた。青湾茶会や京都府画学校の設立など、直入の生涯の活動は制作にのみ留まるものではないからである。これらの側面からも、直入の研究は進展しなければならないはずである。

本稿は、直入研究の最終到達点ではなく、ひとまずの出発点として、彼の長い人生を整理した上で、いくつかの論点を設定し、それらについての試論を述べたものである。筆者は、田能村直入について、さらに複数の論点¹⁹⁾を保持して研究を深めつつあり、これらについては別稿を期している。

注

¹⁾ 大村西崖. 文人画の復興. 工藝社. 1921年. 1頁.

²⁾ 直入の伝としては、田能村小齋・田能村小篁. 直入美話. 田能村小齋私家版. 1907年. があり、奥田天門. 直入先生系伝. 石敢堂書房. 1908年がある。遺族と門人の著したもので、潤色を割り引く必要はあるが、歿後ほどなく刊行されているだけに資料的価値が高く、後年の渡邊勝. 直入居士伝. 画神堂. 1925年. や湯川玄洋. 近世雅人伝. 芸艸堂. 1930年. はこれらに依拠している。また、田能村直外. 画神百年祭并直入道人七十五周年記念祭 田能村直入翁年譜. 画神堂. 1984年. はその後の情報を加味したものらしく、年の推定においては妥当性が高い。本稿においては、これらに依拠しつつ、正確性が高いと思われる情報をこれらの諸書から抽出して叙述したが、煩を避け、字数を節するために一々の出典を注として示していない。なお、これらの書によって直入の略伝を短文で紹介した先例としては原田平作. 幕末明治京洛の画人たち. 京都新聞社. 1985年.、大槻幹朗. 文人画

家の譜．ペリかん社．2001年．がある。このほか、展覧会図録としては奥田忠雄・田能村直入と富岡鉄斎：その画業と南画の軌跡．京都府立総合資料館．1985年．、田能村直入と森六峯作品図録．井原市立田中美術館．1992年．、没後百年 田能村直入．竹田市歴史資料館．2007年．、没後百年 南画の真髓 田能村直入展．丹波市立植野記念美術館．2007年．がある。なお、天門美術館編．田能村直入とその子弟．天門美術館・山添天堂堂．2022年があるが、本稿は刊行前の脱稿であるため、その内容については反映していない。

- 3) 拙稿．頼山陽と田能村竹田、そして田能村直入へー近世・近代の南画の系譜．目の眼．第540号．目の眼社．2021年8月．直入の芸術については略述した。
- 4) 『晋書』顧愷之伝、参考。
- 5) 『田能村直入翁年譜』は「文化五年 九歳 竹田荘に入塾す。竹田これを愛し、遂にその姓を冒さしめ、名を蓼、字を虚紅と呼ばしむ」と記す。あるいは、その後の数年のうちにと読ませているかもしれないが不詳。
- 6) 石田誠太郎．大阪人物誌．石田文庫．1926年．21丁裏．
- 7) 木崎好尚．百年記念 田能村竹田先生．山陽会．1834年．201頁．
- 8) 一方でこれ以前、小栗布岳は『豊絵詩史』を執筆するにあたって京都に直入を訪ねたが、面会日と定めた五と十の日でなかったために女中の取次を得られず、憤然として帰ったことがあったといい、竹田の孫で如仙の息である田能村孝策も同様の目にあったことがあったと『直入居士伝』が記している。このような行き違いもその後の直入の評に影響していたと思われる。
- 9) 先の岡田半江の助力、この篠崎小竹の助言からも、直入が竹田の旧友たちと良好な関係を保っていたことが知られ、直入田能村姓僭称説を退ける根拠の一ともなっている。
- 10) 本作を含めた969点は現存が確認できておらず、その発見は今後の課題でもある。
- 11) 直入居士．青湾茶会図録 天・地・人．田能村氏私家版．1863年．
- 12) 萱島は、大阪国際大学所在地から徒歩圏内の、ごく近隣の地域であり、筆者はこの別荘の詳細を知るべく調査を行っているが、すでに160年を経過しているため、伝存情報は極めて乏しい。「於百襟圃」と記す作例（大分・個人蔵）は発見できており、今後も調査を継続したい。
- 13) 植田彩芳子・中野慎之・藤本真名美・森光彦．近代京都日本画史．求龍堂．2020年．で、森氏によって全文が翻刻・現代語訳されている。
- 14) この櫻井家の蔵品は可部屋集成館として公開されており、現在もなお直入の作品や資料を伝えている。
- 15) これらの作品は現存し、京都市立芸術大学芸術資料館での「南宗憧憬－京都芸大の中国絵画 田能村直入寄贈品を中心に－」（2020年9月）などの展覧会で折々に公開されている。
- 16) 最大の悪評は『直入居士伝』にも引かれる、直入の画料の高さに対する京雀の言「あの先生は直入さんぢや無い、欲入さんや」であろう。ただし、これは本論で述べているように、京都府画学校や南宗画学校のために、通常の画家とは全く異なる目的で直入が資金を必要としていたことを割り引いて考える必要があるだろう。
- 17) このほか、明治24年（1891）に倉敷・阿智神社に建立された画神碑がある。
- 18) 若王子の画神堂は直入曾孫、田能村直外の歿後に取り壊されたが、土蔵が現存、現在は若王子倶楽部 工芸&サロン ギャラリー左右として使用されている。佃梓央・前崎信也．自分で愉しむために茶を入れる．目の眼．第540号．で現況が紹介されているほか、かつての様子を田能村直外集．京都高島屋美術画廊．1995年．が「直外の一曰」と題する写真群で紹介している。直外歿後に京都府に寄贈された画神堂資料群については野口剛．直入の中国画学習：京都府立総合資料館蔵田能村家資料の紹介．京都文化博物館研究紀要 朱雀．第12集．京都文化博物館．2000年3月に詳しい。
- 19) 安政2年（1855）に病を得た直入が、病床で綴った画論書『南画真趣』の解説・分析や、架蔵の『南宗画学校応募者人名元簿』の整理、田能村直外の歿後に安田虚心を経て高槻市内に伝存した画神堂

国際研究論叢

旧蔵資料群の調査を進めている。さらに、田近竹邨や田中柏陰、一時南宗画学校に在籍し、山口県の香川学園の創立者となった香川芝香などの門弟たちについても研究を深めつつある。

図版出典一覧

図1, 直入居士伝、図4, 青湾茶会図録天、図7, 鹿子木孟郎画伯還暦記念会、不倒山人鹿子木孟郎画集、同会、1934、図2, 3, 5, 6, 筆者撮影。